クリスチャンとして生きる

2025年10月9日
西九州伝道所
佐々木正明

今回は、「クリスチャンとして生きる」という主題の、導入部分をお話します。 普通の言い方をすれば、「聖書の教えの通りに生きればそれでいい」というだけのことですが、事は、そう簡単ではありません。私たちの周囲にある教会、私たちが見つけ出すことが出来る牧師や、聖書を教えてくれる人たちは、まず、100%、聖書を正しく理解していないために、彼らの教えを聞いていては、聖書の教えを正しく理解することはできません。では自分で聖書を読んで理解しようとしても、聖書はとても厚い書物である上に、極めて難解な書物でもあるからです。ですから、聖書の教えの通りに生きると言っても、あまり意味のないことになります。

そこで、佐々木牧師の出番になるのですが、佐々木牧師が、これが聖書の教えですと言っても、殆どの牧師、あるいは年季の入ったクリスチャンたちは納得してくれません。ですから、皆さんはとても注意深く、佐々木牧師の話を聞かなければなりません。おかしく思うところ、わからないところ、他の牧師や教会が教えているのとは違うなと気づいた点があったならば、聞き逃さないでください。わからなければ質問してください。牧師が話をしている時でも構いません。「質問があるのですが」と声を出して下されば、佐々木牧師は、その質問に耳を傾け、出来るだけお応えいたします。もともと説教とは、会話の発展したものであると心得ていますので、一方的に話しっぱなしの説教は嫌いなのです。その代わり、納得できたときには、「わかりました。アーメン」と、声をかけてください。

ご存知のように、佐々木牧師はキリスト教の牧師を辞めたと宣言しています。キリスト教の牧師を辞めて、イエス様の教えと聖書の教えを伝える牧師になりますと、言い続けています。それは、私たちが言うキリスト教という宗教は、西欧の人々、主に白人が、自分たちに都合が良いように、自分たちの生活に合わせて作り上げた宗教だからです。その宗教が人類の歴史の中で、もっとも醜いことをやって来た、恥ずかしい宗教だと判断せざるを得なかったからです。

勿論、彼らも聖書を用い、イエス様の教えを伝えています。中には素晴らしい聖書の理解もあり、とても役に立つ解説もあり、感動させられることもたくさんあります。でも基本的に、彼らのキリスト教は、自分たちの文化や習慣の中で育てられた、自分たちの感覚と、自分たちの言葉と、自分たちの理解力で聖書を読み、キリスト教という宗教を作りあげ、それを絶対視してきたのです。自分たちの理解に合わない教えや習慣や文化や宗教は、ことごとく敵対視した上で、迫害し排除し続けてきたのです。そのためキリスト教の教えは、本来の聖書の教えとはかなり異なり、もともとのイエス様の教えとも、ずいぶんかけ離れたものになって

いるのです。

佐々木牧師はいま、牧師になってちょうど60年になりますが、そのことに気づいたのは 40 年ほども前になります。そのとき以来、本当の聖書の教えとは何か、イエス様がお教えになった教えの本当の意味は何かと、考えながら学び続けて来ました。そしてやっと少しずつ分かって来たのです。

西欧のキリスト教、日本にも伝えられ、殆どのまじめな教会が疑いもせず、真面目に信じてきた教えには、たくさんの間違いがあります。その中で、もっとも重大なあ誤り、あるいは間違いの根元とも言えるのは、「置換論」といわれる理屈を、受け入れてしまったことです。これは、イエス様が天にお帰りになってすぐに、残された弟子たちの中に芽生えた考え方です。それがあれよあれよという間に、大きく育ち広がって、全教会を覆うようになってしまったのです。そしてその教えは教会にとって、とても都合が良かったために、がっちりと教会の基本的な理解、あるいは教会の基礎的な教えとして取り入れられ、誰にも妨げられずに今日まで来てしまったのです。

いまから100年ほど前に、この「置換論」あるいは「置換神学」に反対する、「ディスペンセーション神学」という考え方が生まれました。私たちの教会も、一応、この神学に属すると言われてはいますが、実際のところは、いまだに「置換神学」の大きな間違いに、どっぷりと浸ったままというか、間違いに流されっぱなしになっているのです。たとえ小規模な神学的異論が出たり、改定論が唱えられたりしても、「置換神学」の屋台骨が崩れることはありません。あまりにもしっかりと教会と結びついて、まさに当然のこととされているため、大声で教えられることも、説教されることもありません。ただ教会の土台、基礎、あるいは大前提となっていながら、土中に埋もれ隠れているために、この教えに気づくこともなく、聞いたことさえないというのが、多くのキリスト教信徒にとっての実情なのです。

何かとても難しい「神学の話」になってしまい、申し訳ないのですが、もう少しだけ、我慢してください・・・・。では置換神学とは何か、そしてどこがいけないのかを、お話ししましょう。「置換神学」とはまず、「教会があらゆる意味で、旧約時代のイスラエルに取って代わった」と考えるものです。神はイスラエル民族を退け、そのままそっくり、教会に取り換えられた、置き換えられたと主張するのです。

神は、罪に陥って滅びの道をまっしぐらに進んでいる人間を哀れみ、これを救ってやろうと、「人類の救い」という大きな計画を立て、その計画の実行のために、様々なことをして下さいました。その内の一つが、多くの民族の中からイスラエルを選び、これを世界中のすべての人々の救いのために働く、特別な民族となるように教え導き、育て上げようとなさったことです。その目的のために、イスラエル民族には、普通、モーセの律法と呼ばれる、戒律をお与えになったのです。

モーセの律法は、およそ400年間もエジプトの奴隷となっていた、イスラエル民族を開放する役割を果たした大指導者、モーセを通して与えられた神からの律法です。またこの律法という言葉は、少し意味が

広げられ、モーセが書いたと考えられている、5つの書物全体に適用されることもありました。さらに、イスラエルの歴史の中で、折に触れて神様の教えや命令や出来事が記されていった、旧約聖書全体を指して呼ぶことも多くなりました。神はイスラエル民族に、このかなり幅をもって語られるようになった、「律法」をお与えになると共に、多くの祝福を与え、守り、導き、繁栄する特異な民族にしてくださったのです。

ところがイスラエル民族は、自分たちが選ばれたのは、自分たちが立派な民族だからだと勘違いをして、誇りたかぶり、傲慢な民族となってしまいました。地上のすべての民族に、神の救いをもたらす祝福の器となる目的、あるいは使命とも言うべきものを、おろそかにしてしまったのです。それで、神様はイスラエル民族を退け、イスラエルに代わる新たな民を建て上げ、全世界の人々に救いの祝福をもたらす働きを、彼らに託してしまわれたのです。その新たな民が教会です。イスラエル民族は、全人類の救いと言う神の祝福の働きを実現するために、特別に召され、教えられ、訓練され、祝福もされていたのですが、その特別な使命を遂行するにはふさわしくないと、神ご自身に退けられてしまったのです。そして、イスラエル民族に代わって立てられたのが、教会なのです。イスラエル民族は、教会に置き換えられたのです。これはイエス様ご自身が教えられたように、間違いのない事実です。(マタイ 21:33-46,マコ 12:1-12,ルカ20：9－19)

ところが教会は、この事実を間違って理解してしまったのです。その間違いの第一は、教会が神から託されたのは、世界中に祝福をもたらす使命だけではなく、イスラエルに与えられた祝福と、その祝福に伴う様々な権利も含まれていると、考えてしまったことです。そのために教会は、旧約聖書に記されているイスラエルの歴史物語を、自分たちが世界を支配するための模範として、そのまま取り入れてしまったのです。それで教会は多くの外国人、異教徒、自分たちに屈服しない人々を、情け容赦なく殺し、滅ぼし尽くす宗教集団になることができたのです。教会自体がそのような非人道的行為に、直接乗り出したわけではありませんが、自分たちが支配していた民族や国々を用いて、そのようなことをやらせてきたのです。

旧約の時代のイスラエルは、周囲の邪悪な民族から隔離され、神の使命を果たす民族として成長するように、神の特別な守りによって保護されていました。そのために神は、「万軍の主」、「戦いに猛き神」となって、イスラエルのために戦ってくださったのです。教会はそのイスラエルの歴史を盾に、自分たちの敵と判断した民族や国家を、次々と襲い、滅ぼしてつくして、良心になんの痛みも感じなかったのです。そのような、戦い続け、支配し続け、滅ぼし尽くす教会の精神は、20世紀の西欧諸国の精神ともなっていました。21世紀となった現代でも、その精神は西欧の国々にも引き継がれているのです。さいわい現在は、かつて教会が支配していた国々はすべて民主主義国となって、かつてのように武力を持って支配し、滅ぼすようなことはしなくなりましたが、その精神はいまも生き続け、グローバリズムという自由経済主義の化け物となって世界を覆い、圧倒的に多数の人々を貧困の淵に追いつめています。

教会が陥った大きな間違いの第二は、イスラエル民族に限って、特別に与えられた律法を、自分たちに与えられたものと理解したことです。旧約時代のイスラエルに与えられた律法も、そのまま、まるごと、教会が引き継いだと考えてしまったのです。この間違いのために、どれだけ多くのキリスト教信徒たちが、特異

な事情の下にあった大昔の人々に与えられた、特異な戒律に、縛り付けられてきたことでしょう。21 世紀に入って四半世紀も経った今に至っても。まだ頑なに安息日厳守を教えている教会があります。什一献金を絶対の義務と教えている教会があります。信徒同士の結婚以外を認めない教会も沢山あります。すべての異邦人文化を、罪の文化と決めつけている教会が沢山あります。あらゆる宗教を、有無も言わせず偶像礼拝と決めつけ、糾弾して止まない教会ばかりです。

イスラエル以外の民族は、みな異邦人なのです。西欧のクリスチャンの大部分も、現代の日本に住む私たちも、イスラエル民族ではありません。現代の教会はイスラエル民族ではないのです。霊的イスラエルと呼ばれ、アブラハムの信仰を引き継ぐと言われていますが、ユダヤ民族ではないのです。イスラエル民族に与えられた、全民族の救いのために働く使命は継承しましたが、全民族を支配したり滅ぼしたりする権利は与えられていません。。あるいは旧約聖書の律法を守るという、重い義務も与えられてはおりません。教会には、イスラエルに与えられた祝福とは別の祝福が与えられています。イスラエル民族に与えられた律法とは、異なった律法が与えられ、イスラエル民族とは異なった祝福が、与えられているのです。

教会は「置換神学」という誤った考え方を持ったために、2 千年にわたって、多くの非人道的なことをし続けて来ました。殺戮や植民地政策の責任を取って、激しく悔い改めなければなりません。旧約聖書の律法を信徒たちに強要することによって、信徒たちにあたえられている自由を妨げてきたことだけではなく、旧約の律法を多の異邦民族、他の宗教の人々にまで適用して、裁き、糾弾し、軽蔑し、裁いてきたことを公にお詫びしなければなりません。私たちの教会は、二千年にわたる教会を代表して、お詫びする立場にはありませんが、キリストを信じる一人一人の人間として、お詫びしなければなりません。肩にタスキをかけて、お詫び行脚に出かける必要はありませんが、機会があるごとに、素直に、そして真面目にお詫びしなければなりません。

牧師である私は、頑固で融通の利かない人間ですので、お詫びなんてしたくありません。ですから、キリスト教の信徒であることを辞めたのです。良心の痛みを感じるからです。幸い私たちのアッセンブリーズ・オブ・ゴッドという団体は、寛容なグループで、聖書の教えに忠実であろうとする人を、追い出したりはしないだろうと高を括っています。そうです。私は、西欧で築き上げられた教会の教えには不忠実で、牧師もやめました。でも聖書の教えには忠実であろうとしています。西欧の教会の人間性に反した考え方、神の姿に似せて造られた人間性を軽んじ、傷つける教えには背を向けます。でも、律法を守るよりは憐れみを大切にする、イエス様の教えには忠実であろうと心がけています。

では聖書に忠実、イエス様の教えに忠実とはどういうことでしょう。それは、神様が人間をお造りになったときに、神様ご自身の姿に似せて人間をお造りになったという、聖書の記述を大切にして生きることです。つまり、神様の姿に似せて造られたという人間の本性、根源的人間性を大切にして、常に人間の本源的人間性を思い浮かべ、それに照らし合わせて考え、否、考える前に本能的にその人間性の感じるままに生きることです。それこそが、キリストがもたらして下さった救いの実現であり、聖霊のお働きの結実です。そ

れはまた、使徒パウロが、ロマ書2章12節から15節で教えていることです。つまり、私たち異邦人には文字で書かれた律法、「養育係」と呼ばれる旧約聖書は与えられていませんが、「私たち自身」あるいは「心の中に書かれている」律法を、与えられているという霊的事実を、私たちの生活の中に具体的に顕わして行くことです。私たち異邦人は、たとえクリスチャンであっても、旧約聖書の律法を私たちのものとすることはできませんが、神様に似せて造られた人間の、本源的人間性とでもいうべき本能が、私たちに対する本能として与えられています。イスラエルに律法が与えられるはるか前から、人間として生きる生きい方を定める律法として、すべての人間に与えられているのです。

この神に似た性質、本源的人間性は、私たちの理性の先に働く力、感覚です。本能的感覚で、何が正しいか、何がどうあるべきかを、考える前に直観的に理解する能力です。神との関係においては、とりあえず、日本語では神(気高く尊く、目に見えず、手で触れることもできず、口で説明することもできない大きなお方)と呼ばれるお方を敬い、畏れ、尊び、賛美し、お仕えしようという本能として現れます。これが人間の宗教性です。日本人が、「神なんていない」と言いながら、自分の宗教性を捨てることも否定することもできないのは、この本源的人間性を持っているからです。人間同士の関係においては、優しく、忍耐深く、鷹揚で、他人の幸せを喜び、そのために尽くそうと思う、自然な感覚、本能として現れます。

私たち日本人のクリスチャンは、旧約聖書の律法によってではなく、この、心に記されている律法によって生きるべきなのです。たとえ、イスラエル民族であったとしても、別に文字で書かれた律法の教えがない限りは、この律法によって生きるべきなのです。この心に記された律法は、旧約聖書の、文字で書かれた律法に先行するものであり、すべての人間が守るべきものなのです。

多くの日本人は、他人を大切にする日本人の性質を、とても気高いものとして保とうとします。そして、様々な人たちが、この性格がどこから来たものかを見つけられないままに、色々な理由付けをしています。たとえば、日本という国の地政学的な側面、強い共同体意識を育んだ稲作文化、あるいは職人気質(かたぎ)を持ち出します。それらの理由は、たしかに一つの要因とはなり得たとしても、原因とはなり得ません。聖書を知らない日本人には知りようがないのです。聖書を知っていると自覚している日本人牧師も、クリスチャンたちも気づかずにいるのです。それが、人間は神の姿に似せて造られたという、聖書が記している事実に基ずくのです。

また、どうして日本人にはその感覚が強いのかということも、日本人が基本的に偶像礼拝をしない民族であるという事実に関係があると、牧師は判断しています。それは皆様もご存知の通りです。ロマ書の1章18節以下を読むとそのことがわかります。神は被造物、すなわち自然物を通してご自分を掲示してくださり、神についての基本的なこと、極めて基本的なことを理解できるようにして下さっているにも拘わらず、人間は偶像礼拝をしてしまったと書かれ、そのために人間はあらゆる罪に陥ったと教えられています。日本人の精神的支柱である神道の精神では、この神様の自己啓示をしっかりと受け取って、神は目に見えず、手で触れられず、口で説明することさえできない、気高い方であると感じて、崇めているのです。ですから、日本

人はほかの多くの民族のようには、神の刑罰を受けていないのです。それが、平和を愛し、人のためになることをして喜ぶ日本人を、作り上げていると考えられるのです。

またたからこそ、私たちは日本人の性質を取り上げ、神様の姿に似せて造られた人間の姿という聖書の教えと絡めて、証をすることが出来るのです。それはまた、多くの教会を離れつつある西欧のクリスチャン、名ばかりのクリスチャンで、教会に失望して、キリスト教は辞めたと言い出している、私のような西欧の人たちにも証が出来るのです。

私たちは、イスラエル民族に代わって、神様の救いの働きに参画させていただく、新しい神の民です。私たちに与えられた使命をはっきりと自覚しましょう。私たちに与えられた命令は、全世界に出て行って福音を宣べ伝えることです。そしてそのために、遣わされた対象の人々と、心を通わせることができるように、生きることです。イエス様はおっしゃいました。「父が私をお遣わしになったように、私もあなた方を遣わす」。イエス様が遣わされた姿、遣わされた有様は、遣わされた世界の人々と同じように生きることでした。私は宣教師をしていた時、もっとも大切にしたのは、私が遣わされた対象の人々、イゴロットと同じように生きるということでした。それが遣わされた者の在り方だと理解していたからです。私たちはキリストの大使だからです。

私はいま、すべてのクリスチャンに提案したいのです。この置換神学を見直しましょう。聖書を読み、調べ、聖書の教えを基準にして、判断をし直しましょう。そしてこの置換神学に立ってあらゆる非人間的行為を行ってきた教会を、自分の問題として悔い改めましょう。そうしなければ、教会が、神様の選びの目的から外れ続けて二千年の今、神様の選びと任命から外されてしまう危険さえあるのです。使徒パウロがこの危険性について、どれだけ理解していたのかは不明ですが、少なくても大いに在り得ることとして語っているのです。イスラエルに代わる民が教会です。しかし教会は、イスラエルが神の目的を果たさなかった以上に、神の目的を果たしていないと判断されても、おかしくないのです。

もう一つ。私はあと一年以内の余命と主治医に宣告を受けて、三か月になります。私自身は平安ですが、日本のクリスチャンたちに言い残したいことがあります。それは、日本人の特質を生かして下さいということです。日本人は、長い歴史の中で、多くの優れたものを外国から輸入してきました。多くの民族は、優れたものを見ると、どうしたらそれを自分のものにできるかと考え、買ったり、盗んだり、真似をしたり色々やるのだそうです。日本人の特徴は、それを自分のものにして満足しただけで終わるのではなく、どうしたらもっと良いものを作ることが出来るかと考え、工夫することなのだそうです。

ですから、今の日本には、もともとは外国のものだったけれど、今はずっと改良され優れたものとされて、巷に溢れているものがたくさんあると言われます。鉄道もそうです。自動車もそうです。また言葉もそうです。日本は普通漢字と呼ばれる文字を、隣の大陸の国々から学び、輸入しました。でもそれだけで満足して終わらず、ひらがなを生み出し、カタカナを作り出しただけでも足りず、その漢字を用いてたくさんの言葉を生み出しました。いま中国で使われ、一般に話されている中国語のおよそ 70%以上は、日本で作られた中

国語というか、和製中国語だそうです。中華人民共和国という国名を取り上げても、元々の中国語は「中華」だけで、あとの人民も、共和国も、日本で作られた言葉だというのです。

日本人は手にすることができたものを、そのまま黙って使い続けるのではなく、どうしたら、もっと良いもの、もっと便利なもの、もっと多くの人々に利用してもらえるものをと考えて、改良し続けるのだそうです。受け入れ、壊し、作り上げるのが日本人です。それが、伝統的な日本人の精神だと言われています。日本人のクリスチャンに訴えます。その日本人の性質を、聖書の勉強、神学の構築にも現して行って下さい。欧米で作られた、白人中心の神学で満足しないでください。それを一度解体し、一つ一つの言葉や概念が、本当に聖書的なものかを吟味しながら、新たな神学を築き上げてください。